新しい自分に

瑠璃奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新しい自分に

【Ｎコード】
Ｎ２９１７Ｒ

【作者名】
瑠璃奈

【あらすじ】
「俺はニセモノでしか無いんだよ」
昔から”ヒロト”として育ってきた。
ニセモノでしかなかった俺。
ある日与えられた”グラン”と言う名前は、唯一自分で居ることができるものだった。
けれどそれも、エイリア学園が無くなった今となってはもう必要の無い物…
俺はまた、ニセモノに戻らなきゃいけないのか…

「や、緑川！」

「あ、ヒロト！…今日はやけに機嫌がいいみたいだけど？」

「当たり前さ！だって今日は……」

ー”基山ヒロト”が変わろうと決意した日なんだから…

・＊・＊・

「…強かったね、雷門。まさか負けるなんて思ってなかったな」

日が暮れるにつれて、徐々に気温が下がってくるのを肌で感じながら、隣の少女に話しかける。

「そう…だな」

無愛想なのはいつもの事だけれど、今日はいつにもまして声に不機嫌さが感じられた。

それほど負けたのが悔しいのか…

キャプテンとして不甲斐なかった俺が許せないのか…

それとも父さんの事が…

重苦しい空気のまま、しばらく何も話さずに二人で夕日を眺めてた。

「なぁ、グラン」

一体どれほどそうして居たんだろうか。
彼女が俺に声をかけて来たときには、もうすっかり日が暮れ、夜空にちらほらと星が瞬き始めていた。

「何だいウルビダ」

素っ気ない返事を返す。
雲に隠れて月は見えなかった。
今夜は満月だったのにな…

「私は……もう、”ウルビダ”じゃ無くなるんだよな」

「……そうだね。”玲名”に戻るのが、嫌なのかい？」

彼女にとって”ウルビダ”と言う名前はそれほど大切な物だったろう。

父さんに、貰った名前だから。

俺たちにエイリアネームとしてそれぞれに名前を与えられたときは、誰もが喜んでいた。
親に捨てられてお日さま園に居た子達は特に、自分を捨てた親に付けられた名前よりも、父さんに貰った名前の方が嬉しかったんだろう。
俺だって、”グラン”を貰ったときは飛び跳ねたくなるほど嬉しかった。
でも、きっと。
俺のこの嬉しさは、みんなの物とは少し違ったんだろう…。

「いや、そうじゃない。ただ…何となく寂しくて、な」

「寂しい、か…」

それもやっぱり、俺の感覚とは似てるようで、全然意味は違うんだろうな。

「グラン…お前は”ヒロト”に戻って、”グラン”でなくなるのが寂しいとかは思わないのか？」

「寂しい……というよりも、名残惜しいかな。俺は…俺は、もう少し”グラン”で居たかった」

「…一緒の意味じゃないのか、それ」

確かに彼女にとっては、そう聞こえるだろう…

でも、俺にとってはそうじゃないんだよ。

「昔よく玲名がさ、俺の事羨ましいって言ってたじゃん？父さんのお気に入りだからって」

「…まぁ…昔は、な」

少し後ろめたそうな声色。

彼女は彼女なりに、俺に対する考えを変えたって事なのだろうか？

「俺は父さんのお気に入りじゃなかったよ。昔も今も父さんのお気に入りは、俺じゃない。”ヒロト”なんだよ」

良いながら彼女の顔を見ると、俺の言いたい事が伝わらなかったの

か、眉間にしわを寄せて考え込んでいる。

「つまり、父さんの本当の子供だよ。俺じゃない、本当の、ヒロトってこと。

”基山ヒロト”はあくまで”ヒロト(ホンモノ)”の変わりでしかないんだよ。

俺は父さんに愛されては居なかったと思うよ。俺に”ヒロト”を重ねていただけだ。

”ヒロト”で居るときは、誰も俺を見てくれちゃいなかった。

そんな俺からしてみれば、”グラン”で居る時は本当の姿を見てもらえてるって思った。

ジェネシスの称号を手にするために、バーンやガゼルのチームと競って来たけれど、父さんは俺の事を特別扱いしなかった。

それは凄く嬉しかった。俺を見てもらえてるんだっていう実感がもてた。

”グラン”の時は本当の姿で居ることができた。あれこそが他の誰でもない、俺自信の姿だったんだよ、きっと。

だから…さ。俺はもっと”グラン”で居たかった。でも、もう戻らないとね。”ヒロト(ニセモノのオレ)”に…」

一気にここまで話したからか、口の中はカラカラだった。

俺自身、何故ここまで心の中を打ち明けたのかはわからない。

今まで誰にも話した事の無かった本音。

俺にそれを話させたがる何らかの雰囲気を、玲奈が持っていたんだろうか…

その彼女をちらっと見てみたけれど、俯いているから表情は分からなかった。

…さすがにいろいろ言い過ぎたかな。

彼女にとってこんなのはどうでも良い話だったろうし。

「ごめん、分け分かんないよね。今の話は忘れてくれないかな？」

「…お前は……何も分かっていない」

玲名の言葉は、その言葉に込められた思いは、俺の予想していたのとは全く違っていた。

彼女の声には…明らかに、怒りが込められていた。

怖いほどに淡々とした口調だけれど、その端々から伺えるとてつもないほどの怒り。

でも、なにが彼女を怒らせたのか、俺には分からなかった。

「”グラン”の時以外は…”ヒロト”で居るときは、誰もお前を見てくれていなかっただと？

良くそんな事が言えたな。

確かに……たしかに、父さんはそうだったのかもしれない。それは父さんとお前しか分からないだろうから、私からは何も言えない。

だがな…父さん以外もそうだったって、言い切れるか？

少なくとも私はそうじゃないと思う。

みんな、お前を見ていた！！ちゃんと！

お前を見て、認めていたから、ガイアの皆は一緒に戦ってくれたんじゃないのか！？

お前を見て、認めていたから、ダイヤモンドダストもプロミネンスも本気でぶつかって来たんじゃないのか！？

お前を見て、認めていたから、イプシロンやジェミニストームはついて来てくれてたんじゃないのか！？

姉さんが救い出そうとしてくれたのは他でもない、”基山ヒロト”だろ！？

雷門が…円堂守が、戦いたいと思ってたのは、一緒にサッカーをしたいと思ったのは、吉良ヒロトじゃない！！お前なんだ！！

ニセモノの変わりとか、そんなの関係ない！！お前はお前だ！！」

途中で感情がとめられなくなったのか、最後の方は怒鳴られてる感じがした。

ここまで玲奈が感情的になるのを見た事なんて、あっただろうか？

いつも冷静沈着な彼女が…

「私が嫌いだったのは”基山ヒロト”だ！！

憎かったのも”基山ヒロト”だ！！

でも、それ以上に憧れて、認めていて、一緒にプレーしたいと思ったのも”基山ヒロト”だ！！

ガイアの…ジェネシスの…私のキャプテンは、”基山ヒロト”だ！！

お前だったから、副キャプテンとして支えたいと思ったんだ！

かっこいいと思って、凄いと思って……

私が…

私が惚れたのはっ！！

基山ヒロト…お前なんだよ…っ」

彼女の言葉に、その思いに…俺は胸を貫かれた。

途端、急にあたりが明るくなった。
雲に隠れてた月が出てきたのだろう…
その影響で、今まで暗くて見えなかった玲名の姿もはっきり見えて来た。
きっと、その顔は怒りで満たされて……

「っ！？」

その顔を見た瞬間、俺は絶句した。
彼女は……泣いていた。
強くて凛々しい姿しか見せてこなかった彼女が、顔を涙で濡らしている…
それほど必死に、俺のために、今までの言葉をすべて心の底から絞り出していたんだ…。

それを感じるとともに、今までの自分がとてもばからしく思えた。
自分の姿は周りに見てもらえないって、勝手に決めつけて来て。
これほどまで俺を見てくれている人が居た事に気がつかなかったなんて…

「玲名の言う通りだね…。俺は何も見えてなかった」

最初からあきらめて、自分を見てもらおうと努力をしてこなかった自分が不甲斐なかった。
勝手な思い込みにとらわれて、周りの事には気がつかず、結果玲名を泣かしてしまった自分が情けなかった。

「気がついたなら、今からでも周りを良く見回せば良い。
お前の周りには…たくさんの仲間が居るだろ？」

今からでも…か。

「そうするよ。
情けない俺に大事な事を教えてくれてありがとう。
今までキャプテンとして認めてくれてありがとう。
そして、こんな…こんな俺を、好きと言ってくれて、ありがとう」

今日から、自分自身のためにも、周りのためにも、彼女のためにも、
自分を変えよう。

だから……

・＊・＊・＊

「今日は…何だよ？」

「…ふふっ。緑川には分からなくていいんだよ」

「なっ…どういう意味だよそれ！自分から話しかけて来たくせにさ」

「ははっ、ごめんごめん」

ねぇ、玲名？

あの日から…丁度1年経ったけど…

俺は…少しでも変われたかな……？

「あれ、ヒロト…何か一人でニヤニヤしてるし…キモ」

「…し、失礼なっ！」

「だってホントの事だし」

「みーどーりーかーわー？…このやろうっ」

どれだけ変われたのかは分からないけど…

毎日、一歩ずつでも頑張ってみようと思う。

新しい自分を目指して……

（後書き）

エイリア後にこんな話があったんじゃないかと言うただの妄想です。
ヒロトがヒロトに戻りたくないと悩んだりとか。
玲名の衝撃告白とか。
いろいろあったと思います、エイリアではきっと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2917r/

新しい自分に

2011年5月16日23時17分発行